

# 大阪大学図書館報

Vol.29 No.2 Sept. 1995 (平成7年) 通巻119号

## 目次

- Cross-Cultural CD (HRAF)試用記
- 学術情報検索システムの試験運用について
- ドイツの図書館
- 教官著作寄贈図書
- 雑誌業務のために他大学のOPACをみる
- お知らせ・会議・日誌

## Cross Cultural CD (HRAF) 試用記

村上 和弘・手塚 恵子

はじめに：HRAFとは何か

HRAF (HUMAN RELATIONS AREA FILES) とは、文化間の比較研究を行うための方法として、G. P. マードックらを中心とするエール大の社会学者たちによって研究・開発されてきた、一種の文献データベースのことである。その特徴は、これまでに調査された民族集団や社会についての文献資料が分類の上、そのまま基礎データとして収録されている点にある。原文の該当する記述がそのまま引用されているため、ある項目について調べたい場合、HRAFを参照すれば原文の該当箇所をその場で読むことが可能となっている。

HRAFは地域別、または民族別に大きく編成され、さらに宗教・婚姻などの大項目をはじめとする、計716の項目に分類されている。ある特定地域について網羅的に情報を得たい場合、ある特定の項目に関して情報を得たい場合などには特に便利である。

今回、このHRAFをもとにしたデータベースCross Cultural CDが大阪大学図書館に導入された<sup>※1)</sup>。現在はまだ試験的に運用している段階だが、いちいち研究室を離れずとも端末から気軽に検索ができるようになっている。本館にある端末の場合、MS-WINDOWS上から検索を行うのだが<sup>※2)</sup>、このシステムでどのような使い方ができるのか、またなにができるのか、ためしに検索してみることにしよう。調べる項目は「中国のシャーマニズム」についてである。

検索のやりかた

検索画面は大きく3つの窓に分かれている。一番上の窓が検索語を入力する窓で、中段が検索件数の表示窓、そして最下段が検索内容を表示する窓となっている。試しに"SHAMAN" (シャーマン) という語で検索してみよう。SHAMANと入力した後、【SEARCH】を左

クリックする。大文字・小文字は区別しなくても良い。中段の窓には検索で見つかった件数が表示される。該当データは499件であった。なお、最下段にはデータベースの内容が表示され、ただちに内容を確認することができる。

さて、該当件数が499というのは参照するには多すぎるので、もっと絞りこむ必要がある。"CHINA"で検索してみると、該当するデータは195件と出た。そこでこの2つの検索結果を組み合わせ、"SHAMAN"と"CHINA"の2語を含むデータを検索してみよう。画面中段の窓を見ると、それぞれの検索結果ごとに#1、#2といった番号が付けられている。今の場合、#1がSHAMANの検索結果、#2がCHINAの検索結果をそれぞれ表わしている。検索語を#1 and #2として検索すると、#1、#2の双方に該当するデータのみが検索できる。該当件数は8と、だいぶ絞りこむことができた。

ところで、検索語が"SHAMAN"だけでは"SHAMANISM"などの関連語を含むデータがうまく検索できない可能性が大きい。試しに、SHAMANISMで検索してみると、176件が見つかった(検索番号は#4となっている)。

次にSHAMANか、SHAMANISMどちらかを含む語を検索する。検索番号を用いて#1 or #4と入力し、【SEARCH】を左クリックすればよい。この結果、599件が見つかった(検索番号#5)。さらに、この中からCHINAを含むデータを検索する。#2 and #6として検索した結果、計19件に絞りこむことができた。

以上は検索番号を利用したやり方だが、最初から(SHAMAN or SHAMANISM) and CHINAと複数の語を組み合わせで検索しても、同様の結果が出てくる。

このように、HRAFの検索ではand検索・or検索・前方一致検索など、各種の検索で用いる演算子を用いることができる。なお、前方一致検索とは文字どおり、語の前方が一致する語を検索してくれるものである。例えば、

SHAMAN\*と、末尾に"\*"を付けてやれば、語の前半がSHAMANとなっている語(SHAMAN、SHAMANISM、SHAMANISTICなど)をすべて検索してくれる。

さて、最下段の窓には検索したデータが表示されているので、それを見てみよう。タイトル・著者名・対象社会などの各種データとともに、該当箇所の本文も表示されている(次ページ参照)。画面をスクロールしていけば、全データをその場で見ることができる。データを見てみると、"WOLF"という名前が良くでてくるので、これを新たに検索してみよう。すると、51件のデータが見つかった。データを良く見ていくと、重複する書名が多いのに気付く。HRAFは基礎資料となる文献から項目ごとに該当箇所を抜き出してきているため、このような重複も起こりうる。また、重複の多さからして、それが中国のシャーマニズムに関する基本的な著作の一つであると推測することができる。

実際、WOLFは『中国文化人類学文献解題』(東京大学出版会)でもその著作に高い評価を受けている人類学者である。HRAFを用いることにより、このようにして参照すべき文献を探し出すことができるとともに、引用されている箇所を読むことにより、ある程度の知識を得ることができるのである。

なお、HRAFのデータはOCM『主題別分類』コードによって分類されている。たとえば「Religional Beliefs and Practices」の場合だと、780:一般、781:神話学、782:宇宙論などに分類されており、このOCMコードを利用して検索するのも可能である。コード表は印刷しておき、端末に備えつけておく予定とのことである。

#### 検索結果の保存(ダウンロード)

検索結果はそのままフロッピーディスクにテキストファイルとして保存することができる。つまり、検索したデータを保存し、エディターやワープロで編集・印刷などを行うことができ

るというわけである。保存された内容は以下のようになる。

No.	Records	Request
1	499	SHAMAN
2	195	CHINA
3	8	#1 and #2
4	176	SHAMANISM
5	599	#1 or #4
* 6	19	#2 and #5
7	51	"WOLF,-ARTHUR-P"

Record 1 of 19 - Religious Beliefs and Practices

TI: Korea: The Hermit Nation.

AU: Griffis,-William-Elliot

SOC: Society-Korea-Asia

FOC: General

TIME: 1877-1880

PUB1: New York: Charles Scribner's Sons.

PAGE: 300

DATE: 1882

TEXT: Shamanism is the worship of a large number of primitive North Asiatic tribes, having no idols except a few fetishes and some rude ancestral images or representations of the spirits of the earth and air. It is a gross mixture of sorcery and sacrificial ceremonies for

(後略)

\*印のついている検索で見つかったデータがレコードとして、すべて保存されるというわけである。

#### マードックの思想とHRA F

HRA F設立の中心的人物であったG. P. マードック (1897~1985) は、エール大学で社会学を専攻、Ph. Dを取得したのち、人類学に転じた人物である。彼の学問的関心はあらゆる民族集団・文化間での比較研究をおこなうことにあっ

た。信頼できる民族誌資料を統計的に処理し、文化を構成する諸要素間の相関関係を統計的に検証できるようにしようとしたのである。HRA Fはこのような考えに基づき、既存のあらゆる民族集団について知られている限りのデータを、主に人間行動の面から分類し、コード化することを目的として設立された。彼の主著『社会構造』(原題 SOCIAL STRUCTURE、1949) はHRA F (正確にはその前身といえる「通文化サーヴェイ」) を用いてなされた通文化的親族研究の例であり、そこで提出された「核家族」(NUCLEAR FAMILY)の語は、社会科学内部に留まらず、日常語としても定着した。

もっとも、このような通文化的比較研究には人類学者による批判の声も多く挙がった。文化的・社会的コンテキストを無視した形で項目間の比較研究を行うという点が厳しく批判されたわけである。また、分類すること自体、作成者の恣意的要素が含まれてしまうため、適切ではないとの批判もある。

しかしながら、このような批判を承知した上で、主に文献検索の道具として使うのであればHRA Fは極めて有用な道具になるだろう。特に電子化されたことで、従来のように特定項目のみを検索するだけに留まらず、本文に含まれるあらゆる単語を検索することが可能になった。それだけ、幅の広い検索が可能となったのである。また、前述したようにand/or/notなどの演算子を用いることにより、さまざまな語を関連づけて検索することもできる。自分の考えに基づいて諸要素を関連づけ、検索することができるというわけである。要は使い次第であり、うまく使えばそれだけ有用な道具となりうるものなのである。

#### データベース利用の現在

化合物・薬品類の構造式など規格化されたデータが大量に蓄積されている自然科学系の諸分野では、データベースの利用は研究を進める上で必用不可欠のものとなっている。一方、人文・

社会科学系諸分野ではある程度データベースの普及が進みつつあるものの、その利用は個々の研究者・研究室単位に限られており、全体としては電子データの利用についての認識が低いように思われる。

人文・社会科学系の学問分野では大きく分けて以下の2形式のデータベース利用が現在行なわれつつある。

1：項目型データベース。パソコンでいうカード型データベースに相当する。独立した諸項目からなり、必要に応じて各項目を参照する。辞典・索引類の電子データ化に適している。

2：テキスト型データベース。『伊勢物語』など特定のテキストをそのまま電子化したもの。文学作品・著作集などの電子データ化に適している。

Cross Cultural CD (HRAF) はこれら2種のデータベースのいわば中間に位置するものである。形式としては項目型データベースなのだが、データ内に文献資料からの引用を含んでおり、たんなる文献索引としての利用に留まらず、簡便に原資料の該当箇所を参照することができる。また、Cross Cultural CD (HRAF) に限った話ではないのだが、電子化されたデータの場合、通常、データ中に含まれるあらゆる語をキー

ワードとして検索対象に指定できる。それだけ使い方の幅が広がるわけである。

インターネットなどのネットワークでは現在、各種雑誌の所蔵目録を始めとして、上述したような電子テキスト、さらには各種学会の梗概なども電子データとして存在している。大阪大学でも今回のCross Cultural CD(HRAF)導入をきっかけとして、今後、人文社会科学系のデータベースがさらに充実していくことを期待している。(文学部日本学講座 むらかみ かずひろ てづか けいこ)

注1 Cross Cultural CDは次の9つのデータベースに分かれており、これらを同時に検索することもできます。

Childhood and Adolescence  
Socialization and Education  
Old Age  
Death and Dying  
Family  
Crimes and Social Problems  
Marriage  
Human Sexuality  
Religious Briefs and Practices

注2 本館以外でも、生命科学分館、吹田分館で利用できます。その他、検索ソフトとしては、MS-WINDOWS上で動くもの以外にも、DOS版(IBM-PC互換機)、Mac版があります。

## 学術情報検索システムの試験運用について

図書館では、昨年度来、標記システムの準備・試験を進めてきました。その結果、一般にご利用いただける状況になりましたので、平成7年7月19日に試験運用を開始いたしました。

このシステムは、本誌117号にて「データベース検索装置」としてその導入を予告していたもので、これにより、研究室等の端末(パソコン等)から学術情報データベースの検索を無料で行うことができます。

現在提供しているデータベースは、MEDLINE(生命科学系)及びCross Cultural CD(人文社会学系)です。

利用方法は、個人が直接図書館に利用申請す

るのではなく、部局単位でまとめて申請することにしてあります。詳細は、附属図書館長から各部局の長宛にお送りした7月19日付文書に記載していますのでご参照下さい。

今回のシステムの準備及び試験については、医学部、大型計算機センター、情報処理教育センターなどの有志の方々に多大のご協力を頂きました。紙面をかりて御礼申し上げます。また、医学部では、WWWにて上記文書を含めて本システム利用に大変有益な情報を提供しておられます。(http://www.med.osaka-u.ac.jp) こちらもご参照下さい。

(システム管理掛)

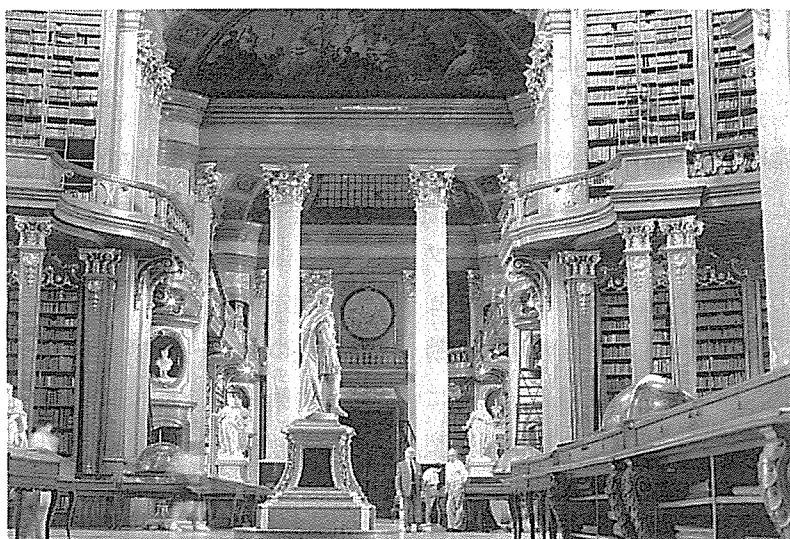
## ドイツの図書館

## アウグスト図書館・ベルリン国立図書館

平田 達治

ヨーロッパの図書館の凄さは「オーストリア国立図書館」の中にある、ヨーロッパ最大のバロック図書室の一つ「華麗な大広間」(Prunksaal)か、あるいはプラハのモルダウ河左岸のフラチーンの丘にある「ストラホフ修道院」(Strahovkloster)の「神学の間」(Theologischer Saal)、「哲学の間」(Philosophischer Saal)と称される図書室を見れば一目瞭然であろう。

劣るが、ドイツ文学者の間で掛け替えのない歴史的な図書館として高く評価されているのが、北ドイツの小都市ヴォルフエンビュッテルにある「ヘルツォーク・アウグスト図書館」(Herzog-August-Bibliothek)である。人口わずか4万少々という、いわば田舎町にドイツ屈指の図書館があるというのも、これまたドイツ的ではある。幼い時から学問に勤しみ、後には戯曲をも書いて「詩人領主」の異名をとったヘルツォー



オーストリア国立図書館の Prunksaal (筆者撮影)

オーストリアは戦争に敗れ続けたことがかえって幸いして、十九世紀後半、見事に文化国家に、そしてウィーンは芸術都市に変身したが、それを象徴するかのよう、首都ウィーンでは、かつてハプスブルク帝国の歴代皇帝が政務を執った王宮が、いまは国立図書館になっている。当然ながら世界でも最も荘重かつ贅沢な図書館の一つに数えられよう。また幾多の戦いに明け暮れたプラハにおいて、戦火を耐え抜いてきた数ある文化財の中でもひときわ群を抜くのが、王宮の立ち並ぶフラチーンの丘にあって、国民文学館にもなっていた上記ストラホフ修道院の図書館とその蔵書である。

これらに比べれば、知名度においては遙かに

ク・ハインリヒ・ユウリウス (Herzog Heinrich Julius 1564-1613) が16世紀後半、イギリスの喜劇俳優を同市に招いてドイツ最初の宮廷劇場を建てたり、あるいはドイツ最初の定期刊行の新聞を発行したりして、小都市ヴォルフエンビュッテルが北独ルネッサンスの文化都市として発展する礎を築いた。ちなみにハインリヒ・ユウリウスは学問芸術の庇護者、美術品の収集家として有名な、ハプスブルク家のルドルフ二世の知遇を得て、晩年はもっぱらプラハに滞在した。こうして始まった文化都市としての性格は、17世紀初頭ヘルツォーク・アウグスト (Herzog August 1597-1666) が先代たちの蔵書に自ら集めた蔵書を加え、蔵書約12万冊を

誇る「アウグスト図書館」を造営するに及んで、不朽のものとなった。その息子で、やはり文人領主だったアントン・ウルリヒ (Herzog Anton Urlich 1633-1714)によってさらに充実が図られ、ヤーコブ・ベーメ (Jakob Böhme 1575-1624)、ライプニッツ (Leibniz 1646-1716)らの大哲学者や、ドイツ啓蒙主義の劇作家レッシング (Gotthold Ephraim Lessing 1729-1781)らが同館のあるいは館長として、あるいは館員としてここに招かれるに及んで、同館はヨーロッパ屈指の図書館となった。1770年から死の年まで同図書館の館長を勤め、傍ら名作『賢者ナータン』などの戯曲を書き上げたレッシングは、着任早々、父に対して「最高に良いのは図書館です。お父さんもすでにその名声はきつと御存じでしょうが、いままで想像していたよりも遥かに素晴らしい図書館であることがわかりました」と、書き送っている。

もう25年も前になるが、ドイツ・マールブルク大学に初めて留学した折、恩師ループレヒト教授のゼミ旅行で同図書館を訪れた時の感動は、今も忘れられない。はじめて目の当たりにしたヨーロッパの由緒ある図書館の、まさに歴史を感じさせる、その豪華絢爛ぶりにまず圧倒された。現在の本とはおよそ趣を異にする、豪華な革表紙の二つ折版、四つ折版などの大型本が、バロック風の大広間の、三階にも四階にも及ぶと思われるほどの高い四面の側壁を、天井までびっしりと覆い尽くしている。あのカール・シュピッツヴェークのユーモラスな絵「本の虫」を幾倍にも豪華にした光景が見られる。現在の総蔵書数は50万冊、いや同図書館の価値は蔵書の冊数よりも、中世の各種聖書の手稿、インクナブラと呼ばれる初期活字印刷本、そして高価な羊皮紙本など、むしろその質の高さにある。特に18世紀までの書籍の蔵書に関しては、数量ともヨーロッパでも屈指の図書館であり、今日、啓蒙主義時代までのドイツ文学、特にバロック文学の研究センターがここに置かれているのも至極当然のことである。そしてフロアーには

バロック時代に愛用された、背の高い書見台や、水車のような形をし、受け木の上に載った本が常に平らになるように工夫された手動式の回転書見台など、書籍の他にも珍しい調度品が多数、当時のままに配置されている。

またこの時わたしたちは、ドイツ書誌学の大家でもある館長パウル・ラーベ教授の館長室に招かれ、ベーメやライプニッツの貴重な手稿を手にとるようにして見せてもらった。さらに書庫や作業室にも案内してもらった。ここでは蔵書の修理作業が年中行われ、全蔵書を改めて調査して、カタログを整理更新する作業を進めているとのことであったが、これにはほぼ一世紀を要するだろうとの館長の言葉が、いまでも印象深く残っている。19世紀後半以降の、大衆時代の廉価本などは、ここの蔵書の横に並べると、いかにも貧弱に見えて仕方なく、おこがましくてとても本などと呼べないように思った。

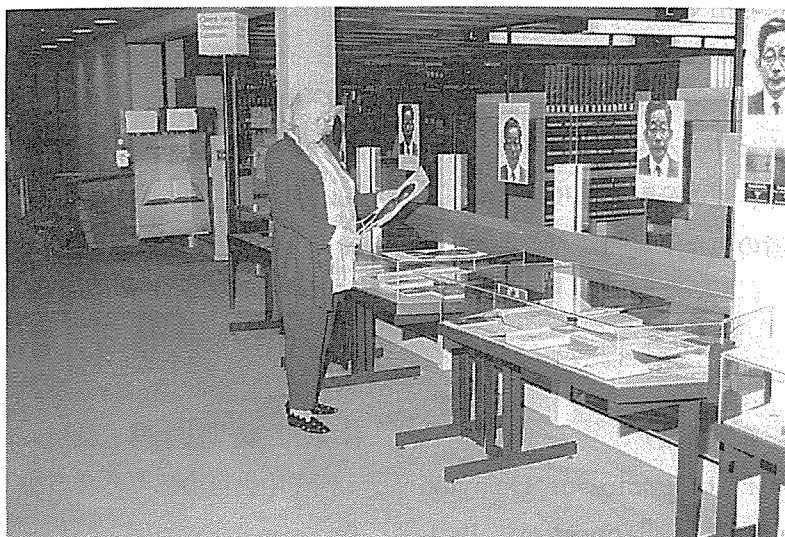
わたしたちは館長の公邸にも招かれ、ワインを御馳走になったのだが、その客間には、ラーベ館長のもう一つの顔、つまりドイツ表現主義研究の第一人者であり、新カフカ全集の編者でもある教授の顔が覗いていた。すなわちガラス張りの書架には、生前自作品の一部しか公刊しなかったカフカの、現在の稀覯本とも言える見事な初版本が何冊も飾られていた。奥様が確かその時、主人はすぐにこうした本ばかり買ってしまうので困っていますと言っておられたのが、いまでも記憶に残っている。妻から言えば、学者たるもの、いずこも同じで、みな本に取りつかれた困り者ということになるのか。

それから数年後のことであるが、17世紀の有名なメーリアンの「絵入り歴史年代記」を所蔵する図書館を探していたところ、やはりこの「アウグスト図書館」にしかないことがわかり、当時マールブルクの大学図書館員をしていた友人のL氏に頼んで、「遠距離貸し出しシステム」(Fernleihe-System)を利用し、保険をかけてこの貴重な本を借り出してもらったことがあった。とにかく「アウグスト図書館」は、ヨーロッ

パの由緒ある図書館とはいかなるものかを最初に知った思い出深い図書館であり、ヴォルフエンビュッテルはわたしが研究対象の一つとしている19世紀の小説家W. ラーベの故郷でもあることから、このゼミ旅行は特に忘れがたいものとなった。

時代は変わったとはいえ、ドイツでは学問に対する篤い尊敬の念が今なお生き続けているが、その証の一つが図書館の充実ぶりにある。それは貴重な文化財ともいえる、上記のような古い伝統を有する図書館の保存に力をいれているからだけではない。第二次大戦後も、単にその蔵書数だけではなく、書誌学、文献学の優れた人材を備え、徹底した資料の収集、その機能的運用から、建物の美的構造に至るまで、どの点をとっても世界に誇りうる第一級の図書館を新設し、造営してきたからである。

(Berliner Philharmonie)の建物と対をなして、その向かいに立つ、同じく超モダンな地上12階、地下3階の建物が、蔵書800万冊、地図・写真の収集資料500万点以上を誇る、ヨーロッパ有数の近代的なベルリン国立図書館である。両建物とも表現主義建築の代表者ハンス・シャルーン(Hans Scharoun 1893-1972)が、1960年代から70年代にかけて建てた、戦後の西ベルリンを代表する建築物である。戦争で廃墟と化していた旧「ポツダム広場」の、「ベルリンの壁」に接するこの場所に、驚異的な建築デザインの文化の両殿堂が建てられたのは、東西冷戦の時代、東ベルリン市民に対しては西側の文化的経済的優位を誇示し、また西の市民には西ベルリンが陸の孤島となっても、決してこれを放棄しないという決意を示すためであったと言われている。その政治的意図はともあれ、



ベルリン国立図書館（第2号館）のアジア部門とヘルガ・ドレースラー博士

その一つがああヴィム・ヴェンダースの名画「ベルリン天使の詩」(Der Himmel über Berlin)の冒頭にも大きく登場する「ベルリン国立図書館」(Staatsbibliothek Berlin)であり、もう一つが南独マールバッハにある「シラー国立博物館」(Schiller-Nationalmuseum)である。

カラヤンがそのアリーナ形式の内部構造を絶賛した、サーカスの巨大テントを思わせる表現主義的な「ベルリン・フィルハーモニー」

ベルリンに伝統的な、高度な前衛的理念と強い実践的知性を実証する、とにかく凄い建築物である。すなわち、前衛的建築家シャルーンの最後の建物として1967年から10年の歳月をかけて建てられ、第二次大戦中、連合軍の爆撃から守るためにマールブルクを初めとする国内25箇所に疎開されていた、旧プロイセン国立図書館の蔵書を引き取り、従来の図書館のイメージを完全に払拭する超モダンな図書館として再出発したのだった。

いかにも現代的で、開放感のあふれるこの図書館の素晴らしさ、設備のよさに惹かれ、また25年来の友人ドレスラー女史がここに勤めていることもあって、1990年夏にも、また昨年の夏にもベルリンへ出かけ、足繁くここに通った。前者のときはロマニストであるラントヴェールマイアー館長にお会いし、いろいろ便宜を図って頂いたし、また昨年はわたしがいま一番関心をもっているヨーゼフ・ロート生誕百年記念の講演会や展示会など、各種催しが何週間にも亘ってここで開かれた。そして文化活動の一大拠点、発信基地としてのヨーロッパの図書館の存在意義を改めて強く感じた。すなわち、地下は講演会用のホール、一階の半分は展示会用の多目的大ロビーと新聞閲覧所、他の半分は全ベルリンに存在する書籍カタログの敷設場所、二階から四階までがいわゆる図書館閲覧ホールで、ヴェンダースの映画にも出てくるように、仕切りが一切無く、段差だけがある広大なホールにモダンな書架と机が、まるで利用者の内面の自由を保証するかのように、広々と並んでいる。また各セクションには、その分野の専門の案内相談係がいて、利用者の色々な質問にも応じてくれ

るし、蔵書検索用のコンピュータも随所に配され、少し離れた中二階のロビーには十数台のコピー機が誰にも利用できるように用意されている。さらにその同じ階には、ホテルのカフェバーを思わせるような、ゆうに70人は入れる立派なビュッフェも備わっていて、喫茶や軽食を随時とることができ、それはもう至れり尽くせりである。そしてベランダや館内には階段ではなく、消音にも効果的な、柔らかなスロープが多用されており、さらに窓は円窓と、いわば建物全体が巨大な客船をイメージして造られている。わたしは一般利用者の入れない、職員専用の部屋や食堂なども利用させてもらったが、上級館員は一人一人個室を持っており、図書館の頭脳にあたる部分の充実振りも目を見張るものがある。東西ドイツの統一後、東ベルリン側のウンター・デン・リンデンにある旧ドイツ国立図書館との統合が進み、昨年より東側が第一館、こちら側が第二館となったが、とにかく、日本の図書館関係者には是非、視察して頂きたいと願わずにはいられない、超モダンな大図書館である。

(言語文化部教授 ひらた たつじ)

### ■■■■■ 教官著作寄贈図書 ■■■■■

#### —本館—

小林 雅通 (理学部・教授)

Collected papers of Professor Hiroyuki Tadokoro and his collaborators, 1954-1994. 4 (Osaka Univ. 1994)

柴岡 弘郎 (理学部・教授)

Proceedings of the 7th international symposium in conjunction with the awarding of the international prize for biology Ed. by Shibaoka. (Osaka Univ. 1992)

興地 斐男 (工学部・教授)

Correlation effects in low-dimensional electron systems Ed. by A. Okiji (Springer 1994)

林 毅 (法学部・教授)

西洋中世自治都市と都市法 林毅著 (敬文堂 1991)

江川 温 (文学部・助教授)

世界歴史大系 フランス史 1 執筆者 江川温他11名 (山川出版社 1995)

柏木 哲夫 (人間科学部・教授)

愛する人の死を看取るとき 柏木哲夫著 (PHP研究所 1995)

死を学ぶ 柏木哲夫著

(有斐閣 1995)



## 雑誌業務のために他大学のOPACを見る

前田 信治

雑誌は注文したら確実に毎号毎号ちゃんと出版社や取り次ぎの業者から送られてくるものだ。そう思っておられる方はきっと多いのではないのでしょうか。私も雑誌の仕事につく迄はそう信じて疑いませんでした。しかし実際はそんな事はありません。4号の次に5号をとびこして6号が来たり、注文してから長期の間1冊も着かないものがあったり、出版社そのものが人知れず消滅していたなどという場合だってありかねません。取り次ぎ業者が手紙を送ってもFAXしてもなしのつぶて、電話連絡だって通じない。今までこんな時は、しょうがないので、「もうこの雑誌は廃刊なんだ」と見做してそれ以上注文するのをやめていました。しかし現在はインターネットを通じ、多くの情報源にアクセスして有益な情報を得る事が可能になりました。アメリカをはじめ世界中の図書館の所蔵目録にインターネット経由ではいりこみ、調べさせてもらうのです。では私がどんな時にこの方法を利用させてもらっているか、23の例を開陳いたします。

## &lt;事例1&gt;

事実 — 年間12冊の雑誌で「No.4 April」と書いてある号の次に「No.6 May」と書いてある号が来た。

私の悩み — おかしいな。一月に一回発行の雑誌なら「No.4 April」の次はどう考えたって「No.5 May」じゃないか。印刷間違いかもしれん。次の号を待ってみよう。

事実 — 次に「No.7 June」が来た、更に「No.8 July」が来た。

私の悩み — 一体「No.5」はどこにいったんだ。そして何月発行分になるんだ？

→ ここでインターネットで英国の大学の所蔵目録を見てみると、No.5の所に注記として「For America only」等と記してあって、No.5はアメリカの購読者にのみ配布する号である事が分かります。

## &lt;事例2&gt;

事実 — 注文してから2年間1冊も来ない。世界の雑誌の発行案内を見ても載っていない。取り次ぎ業者に尋ねても「すみませんねえ、何遍FAXしても連絡がないんですよ」。

私の悩み — 廃刊になったなら手紙の1通位くれればよいのに。研究室からは早く読みたいと何度も督促が来てるし。どうしよう。

→ その出版社の所在地にできるだけ近い大学や当該国内の大きな大学の所蔵目録を見てみます。するとはっきり「廃刊」と書いてあったり、あるいは多くの大学で特定の巻号を最後にその後の分が到着していないといったような事実、タイトルが変わった等の情報が入手できて大変参考になります。

## &lt;事例3&gt;

事実 — いつもは順調に発行されて順調に到着する雑誌。今年はまだ10月だというのに5月号までしか着いてない。取り次ぎ業者に聞いても「すみませんねえ、(以下省略)」

私の悩み — 本当に発行が遅れているならしかたないけど、発行されていて発送されてなかったり、流通のどこかで障害があるのならゆるせんな。ああ、真相が知りたい。

→ 国内国外、かたっぱしから大学の所蔵目録にアクセスして、6月号以降を持っている所を探します。もしもみつかったら「ボストン大は最早ちゃんと10月号まで持っています。発行されているのは確実にすから早く納品して下さいよ」。

私がいこれらのやり方でよく利用する大学は(今のところ)

日本では 筑波、東大、東工大、電通大、早稲田  
海外では Boston、California、Stanford、Harvard

今後少しずつ増やして行って、「この分野はあの大学が充実している」等の経験的な知恵をつけて調査ができるようになれば、もっと有効にこの手段を活用できる事と思います。TELNETでインターネットを通じこれらの作業をしています。他にも、大学以外にも政府や情報企業にもアクセスできて、私の知らない且つ有効なつかいみちがまだまだあるようです。WWWのビューアを使い、色鮮やかな画面を見つつサーフィンしているうちに、多分、役に立つ新しいデータベースやその利用の方法を発見する事になるでしょう。

(吹田分館 資料受入掛 まえだ しんじ)

## お知らせ

### 吹田分館開架図書の配置換えについて

吹田分館では従来指定図書を別置していましたが、一般開架図書に組み込み混配し、NDC（日本十進分類法）分類に基づき、ご利用いただけるようになりました。配架場所は、次のとおりです。

NDC分類記号	配架場所
000～399	旧館2階第3閲覧室
400～499	書庫1層

500～599 旧館2階第2閲覧室

600～999 旧館2階第3閲覧室

### 基礎工学部図書室の書庫整理終了

基礎工学部第2書庫の整理作業が終わり、地震後、利用停止にしていた1980年から1984年までの和・洋製本雑誌が利用できるようになりました。

長い間ご迷惑をおかけしましたが、ご協力ありがとうございました。

## 会議

### 分館長会議

7.7.5(水)14:55～15:18 (待兼山会館会議室)

1. 図書館委員会の進行について協議した。

### 図書館委員会

7.7.5(水)15:30～17:20 (待兼山会館会議室)

1. 平成7年度予算配分案について審議し、配分の基本方針について承認された。
2. 電子的情報資料購入費による資料の収書について審議した。
3. 学術情報システムの運用について審議した。

### 吹田地区運営委員会

7.7.11(火)13:30～14:30 (吹田分館会議室)

1. 平成7年度の学生用図書執行計画について審議し、原案どおり承認された。

2. 委員会の運営を能率的に行うため、議題が共通する場合は、吹田地区運営委員会と工学部図書委員会を合同で開催することになった。

### 生命科学分館運営委員会

7.7.20(火)15:00～17:10(生命科学分館会議室)

1. 平成7年度製本費予算分配について審議し原案どおり承認された。
2. 平成8年度資料費部局分担方式について、提出された2つの案を分担検討小委員会にて検討していくことが了承された。
3. 電子的情報資料の選定について、運営委員が中心になり積極的に取り組んでいくことが了承された。

## 日誌

H 7.6.9.	近畿地区国公立大学図書館協議会総会	(神戸商船大学)
6.28～6.29	国公立大学図書館協議会総会	(東京工業大学)
6.30	外国雑誌センター館会議	(東京大学)
7.5	分館長会議	(待兼山会館)
7.5	図書館委員会	(待兼山会館)
7.11	吹田地区運営委員会	(吹田分館)
7.20	生命科学分館運営委員会	(生命科学分館)
7.25～7.27	目録システム地域講習会	(本館)
8.24	図書館情報システム特別委員会 ILL 専門委員会	(本館)
8.31～9.1	ILLシステム地域講習会	(本館)